麦野A遺跡

—麦野A遺跡群第10次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第719集

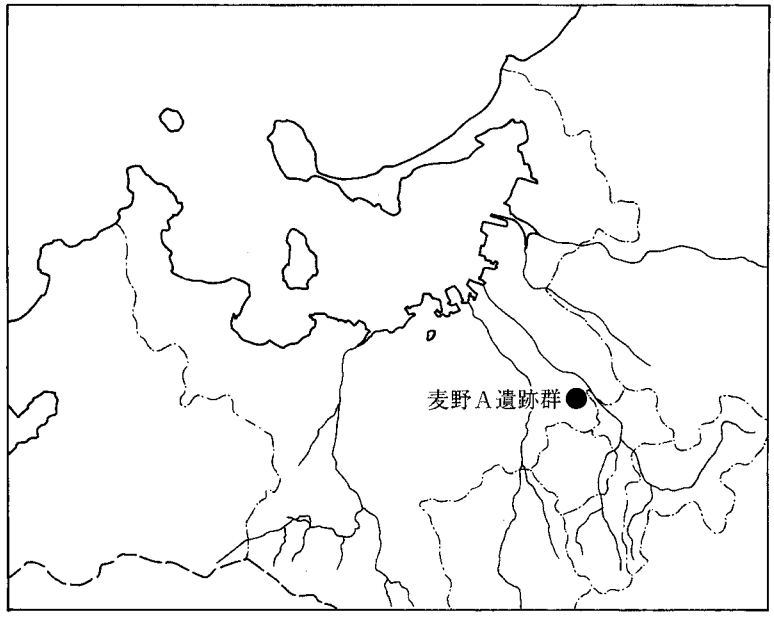
2002
福岡市教育委員会

MUGI NO

麦野A遺跡

—麦野A遺跡群第10次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第719集



2002

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は博多区麦野における共同住宅建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。本書が埋蔵文化財保護のご理解と研究資料として僅かでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査を行うにあたり地権者である長沼廣臣氏をはじめ多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は博多区麦野５丁目２－33地内における共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が平成12年度に実施した麦野Ａ遺跡群第10次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構番号はその性格に関係なく通し番号とした。
3．遺構の実測は中村啓太郎、高木誠が行った。
4．遺物の実測は中村が行った。
5．製図は林由紀子、中村が行った。
6．写真は担当者が撮影した。
7．本書で用いる方位は磁北である。
8．018号土坑出土の馬の歯については埋蔵文化財課　文化財主事　屋山洋氏に鑑定して頂いた。
9．本調査に関する図面、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
10．本書の執筆、編集は中村が行った。

調査番号	0061	遺跡略号	MGA―10	調査面積	404.5㎡
調査期間	平成13年１月17日～平成13年３月17日				

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査体制……1
Ⅱ．位置と環境……2
　1．位置と環境……2
　2．これまでの調査……2
Ⅲ．調査の記録……5
　1．調査の概要……5
　2．竪穴住居……7
　3．掘立柱建物……8
　4．井戸……9
　5．溝……9
　6．土坑……14
Ⅳ．おわりに……14

挿図目次

第1図　麦野A遺跡群周辺遺跡分布図（1/25,000）……3
第2図　麦野A遺跡群調査地点位置図（1/5,000）……4
第3図　第10次調査区位置図（1/500）……5
第4図　第10次調査区遺構配置図及び1地点東壁土層図（1/200・1/40）……6
第5図　025号住居及び出土遺物実測図（1/60・1/3）……7
第6図　022・030・031号建物及び出土遺物実測図（1/60・1/3）……8
第7図　024号井戸実測図（1/60）……10
第8図　024号井戸出土遺物実測図（1/3）……11
第9図　001号溝及び出土遺物実測図（1/40・1/3）……12
第10図　008号溝・007・018号土坑及び出土遺物実測図（1/40・1/3）……13

図版目次

図版１　（１）調査区１地点全景（南から）　（２）調査区２地点全景（西から）
図版２　（１）025号住居（西から）　（２）022号建物（南から）
図版３　（１）024号井戸（西から）　（２）001号溝（南から）
図版４　（１）001号溝土層（南から）　（２）018号土坑（東から）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

平成12年6月20日、長沼廣臣氏より共同住宅建築のため、福岡市博多区麦野5丁目2－33における埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。試掘調査の結果、地表直下で溝、土坑、柱穴等が検出された。その成果をもとに協議を重ねたが、現状での保存、設計変更は不可能との結論に達し、麦野A遺跡第10次調査として発掘調査を行うこととなった。調査地点は計画建物の配置から南北2箇所に分かれる形となったが、南側の地点は調査開始時まで既存の建物が残り調査中の解体となったため、解体作業終了後、再び試掘調査を行い、状況を確認して調査についての判断を行うことになった。

調査は平成13年1月17日より開始し、同年2月9日に北地点を終了し、解体作業による中断を経た後、南地点を2月21日に試掘を行い、遺構が確認されたため、翌日22日より調査を再開し、3月17日に無事終了した。

また調査を行うにあたり、地権者である長沼廣臣氏及び積水ハウス株式会社には多大なご協力をいただいた。記して感謝いたします。

2．調査体制

事業主体	長沼廣臣
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部長　柳田純孝
	埋蔵文化財課長　山崎純男
	調査第二係長　力武卓治
事前審査	事前審査係長　田中寿生
	主任文化財主事　大庭康時
	事前審査係　大塚紀宣　加藤隆也（前任）
調査庶務	文化財整備課管理係　御手洗清
調査担当	調査第2係　中村啓太郎
調 査 員	高木誠
調査作業	井料国彦　小川秀雄　園田豊　徳永榮彦　吹春哲男　宮崎雅秀　井上ヨシ子
	尊田絹代　富永美樹　光安昌子　安田光代　山田マサ子
整理作業	林由紀子

Ⅱ．位置と環境

1．位置と環境

福岡市は北を玄界灘に面し、背後には背振、三郡、犬鳴山系が囲み、半月型の福岡平野を中心に位置する。市域面積は約338k㎡を測る。

今回調査を行った麦野A遺跡群は福岡市の南端、福岡平野を流れる御笠川の中流左岸、那珂川との間の南北に延びる丘陵上に位置する。丘陵はAso－4火砕流によって形成された火砕流台地であり、遺跡群はその上位層である鳥栖ローム層を基盤とし、谷によって分けられ、北より麦野A遺跡群、麦野B遺跡群、麦野C遺跡群、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡と呼ばれている。これらの遺跡群は旧石器時代～近世に至るまでのものがみられるが、縄文時代、古墳時代の遺構は少なく、その中心をなすのは弥生時代と古代である。とくに古代前半期において著しく、古墳時代の遺構が希薄であるのとは対照的に爆発的に増加する。まず7世紀末～8世紀初頭には雑餉隈遺跡群第9次調査で、方形の配置を持つ大型掘立柱建物群が検出されている。規模、配置から官衙的性格が想定されている。8世紀前半から後半にかけては丘陵全体に急速に集落が広がるが、北部に比べ、南部の雑餉隈遺跡から麦野C遺跡にかけてその密度はきわめて濃い。集落の成立については自然発生的なものではなく政治的要因が想定されている。8世紀後半～9世紀初頭にかけては、今回調査を行った第10次調査に北接する第7次調査で2時期の溝、柵列、門遺構が確認されている。その規模、構造から官衙関連の遺構と考えられ、調査地点北側には大規模な本体施設の存在が予想される。9世紀代には集落は極端に縮小し、遺構は散漫にしかみられなくなる。中世においても状況はあまり変わらず、麦野遺跡群を中心に遺構が確認されている。

2．これまでの調査

麦野A遺跡群ではこれまで11次にわたる調査が行われている。

第1次調査　中世後半の掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、溝、ピット等が検出されている。

第2次調査　近世の井戸、土坑等が検出されている。

第3次調査　奈良時代の竪穴住居、土坑等、中世前半の掘立柱建物、土壙墓、土坑等が検出されている。

第4次調査　奈良時代～平安時代の井戸、ピットが検出されている。

第5次調査　古代の井戸、土坑が検出されている。

第6次調査　古代～中世の土坑9基、溝3条、竪穴住居1軒、井戸1基、ピット多数が検出されている。

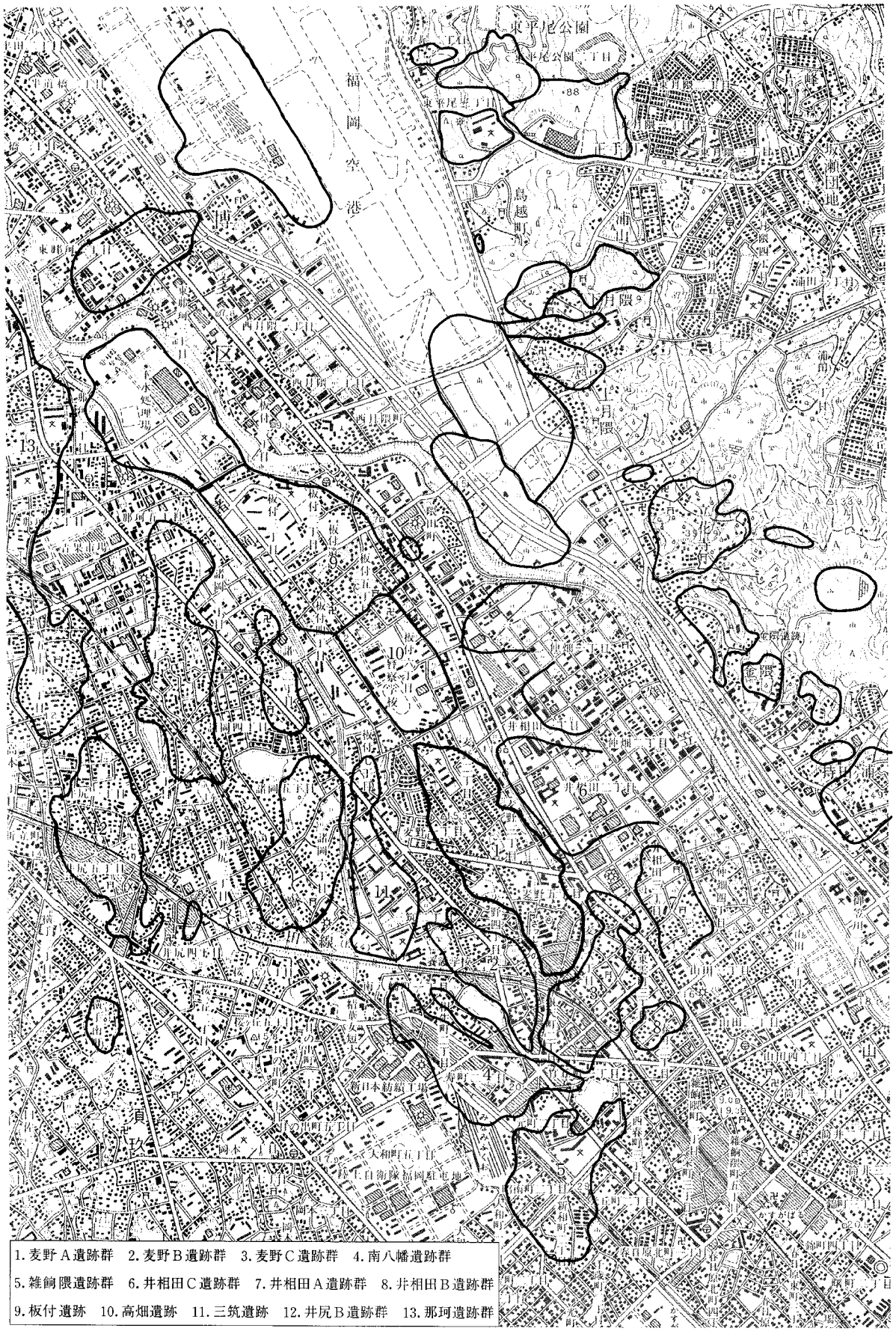
第7次調査　古代の公的施設と考えられる2時期の溝、柵列、門遺構、中世の溝、掘立柱建物数棟が検出されている。

第8次調査　竪穴住居4軒、掘立柱建物1棟、ピット多数が検出されている。

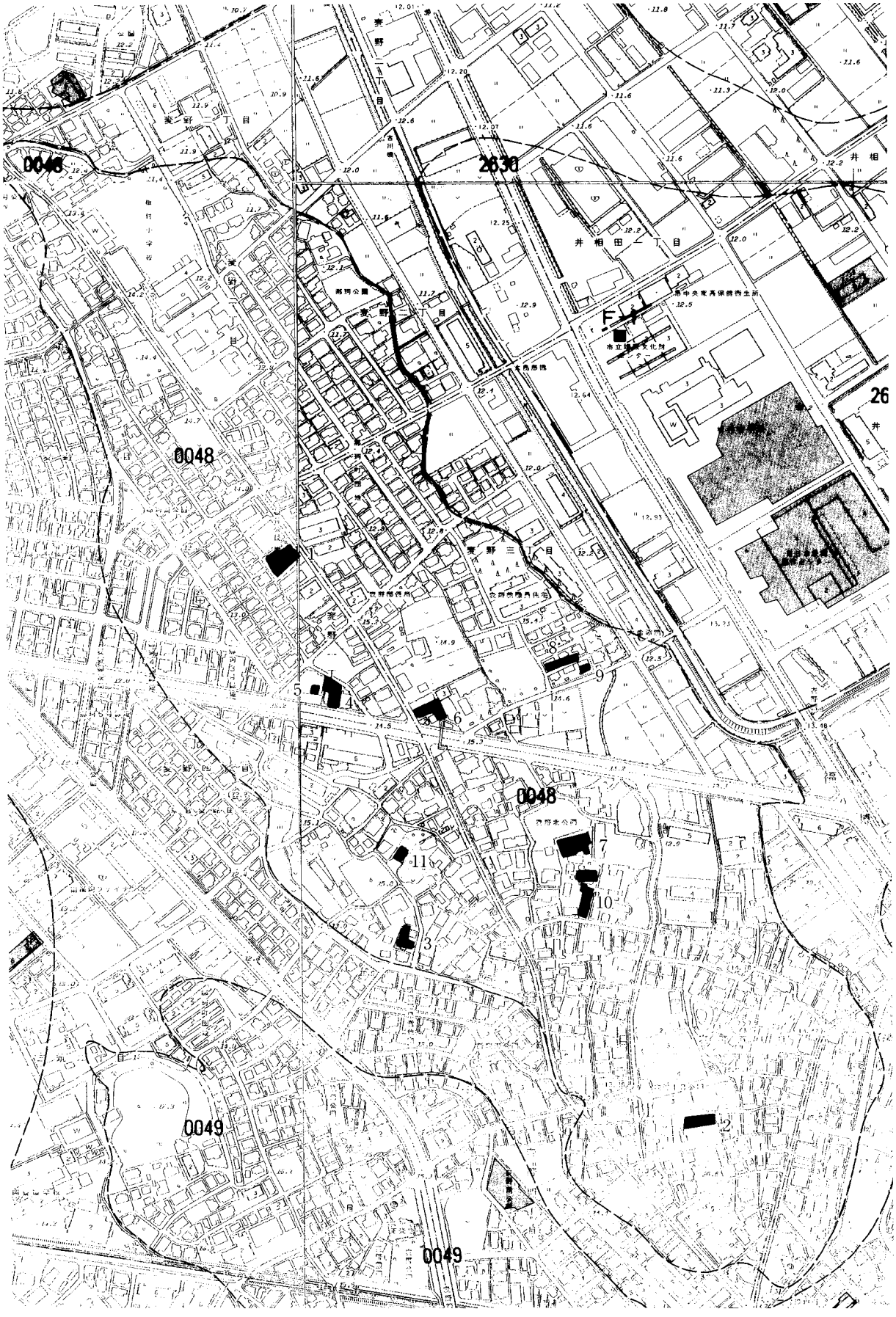
第9次調査　溝4条、土坑、ピットが検出されている。

第10次調査　本報告

第11次調査　落とし穴状遺構1基、古代の竪穴住居3軒が検出されている。



第1図　麦野A遺跡群周辺遺跡分布図（1/25,000）



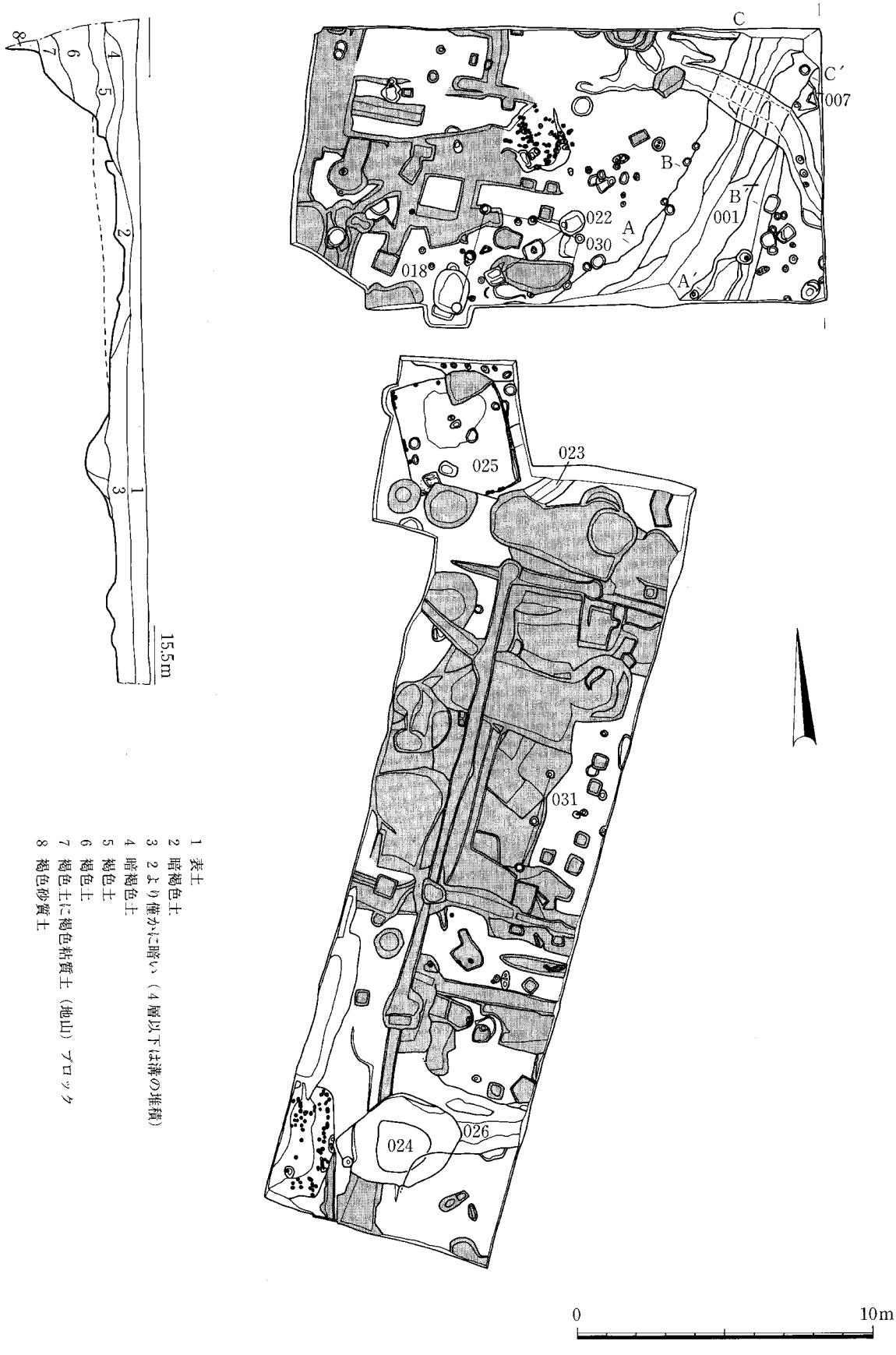
第2図　麦野A遺跡群調査地点位置図（1/5,000）

Ⅲ．調査の記録

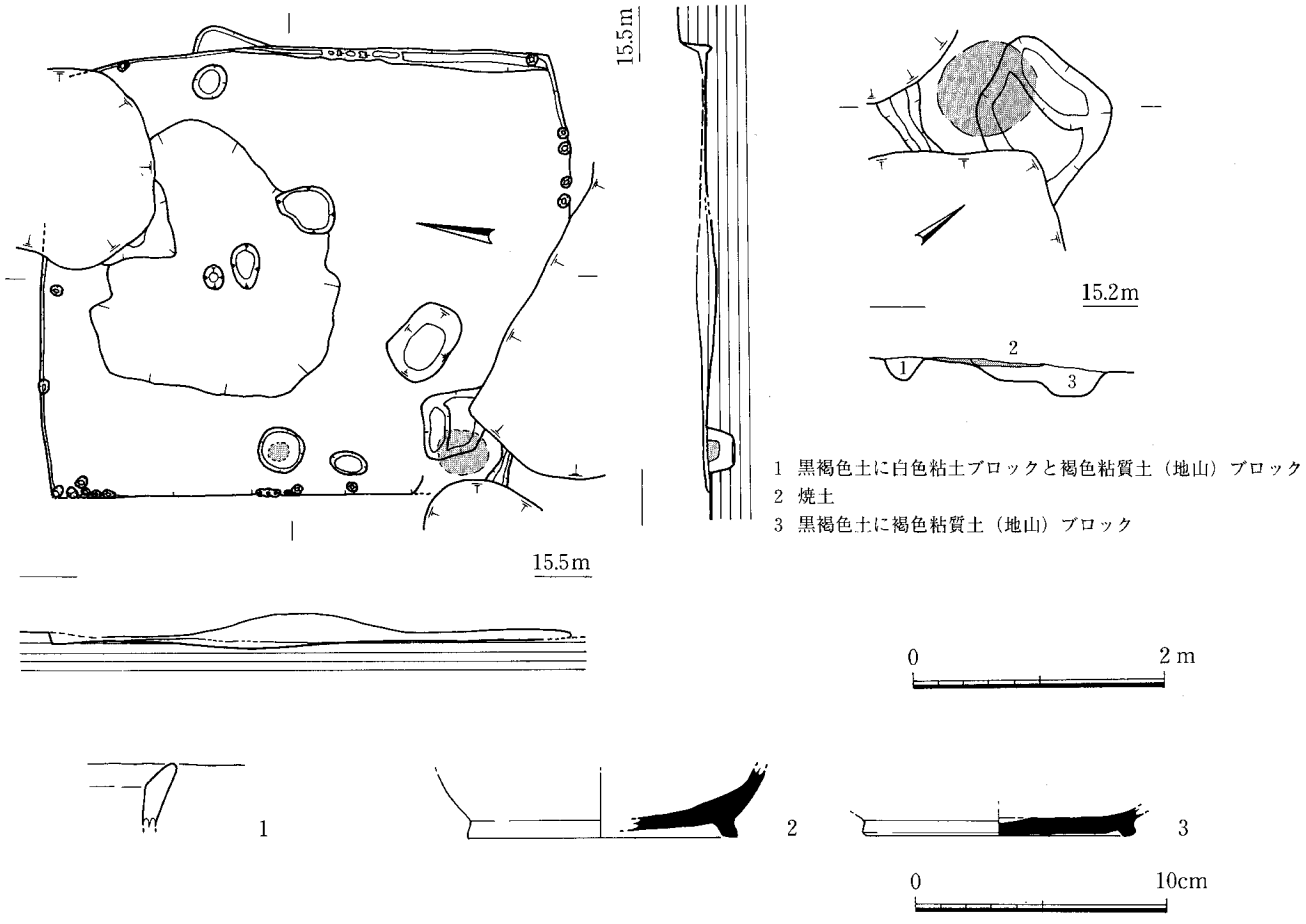
1．調査の概要

調査に至る経過でも触れたが、計画建物の配置から２地点に分かれた調査となった。便宜上、北側を１地点、南側を２地点とした。現地表から15cm～60cm下げた、標高15mのところで遺構面である鳥栖ローム層となる。また調査対象地は北から南に向かい緩やかに傾斜する。調査区全域にわたり削平、撹乱が多く、遺構の残りは極めて悪いが、検出した遺構は２地点合わせて竪穴住居１軒、掘立柱建物３棟、溝４条、井戸１基、土坑、柱穴等である。調査面積は１地点167.1㎡、２地点237.4㎡、合計404.5㎡である。

第３図　第10次調査区位置図（1/500）



第4図　第10次調査区遺構配置図及び1地点東壁土層図（1/200・1/40）



第5図　025号住居及び出土遺物実測図（1/60・1/3）

2．竪穴住居

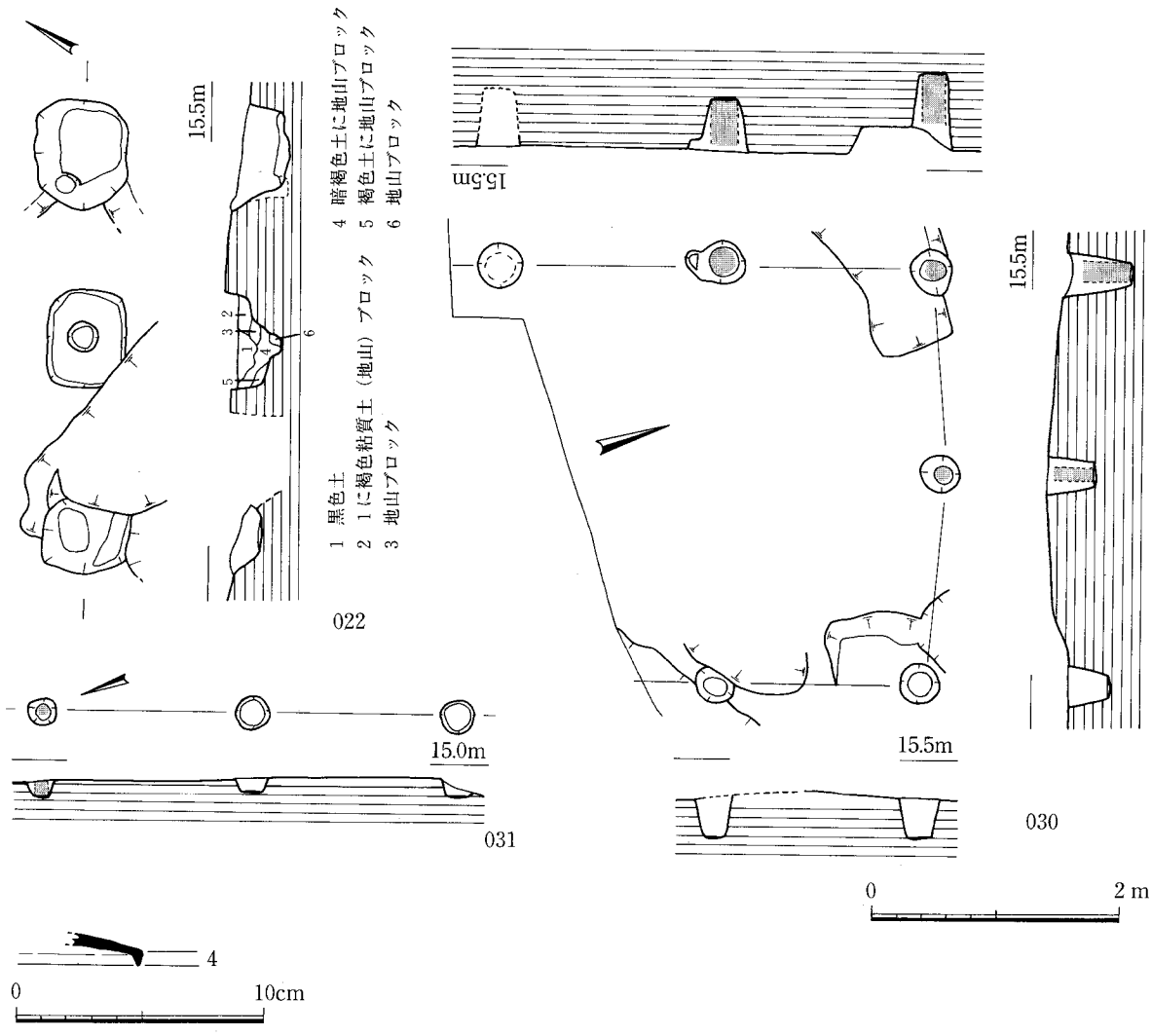
2地点で1軒確認したのみである。この住居は調査区端にかかっていたが、遺構の性格が確認できなかったため調査区を拡張して検出した。

025号住居（第5図）

2地点北端に位置する。北東隅と南東隅を撹乱によって破壊され、全体に削平を受けている。平面形は方形を呈し、南北推定4.13m、東西3.55m、深さは一部最大で25cmを測るが大半は床面のみの遺存である。竈は南東隅に付設されるが、袖部は削平され火床面のみ遺存する。壁溝は東壁側に認められ、壁溝部も含めてすべての壁際に小穴が巡る。床面は中央部に薄い貼床が施される。主柱穴は確認されなかった。

出土遺物（第5図）

遺構の残りが悪いため出土遺物は少ないが土師器及び須恵器が出土している。1は土師器甕の口縁部である。風化により器壁は荒れており調整は不明。2、3は須恵器の椀である。2は復元高台径10.6cmを測る。焼成不良で器壁は荒れており調整不明。3は復元高台径10.6cmを測る。焼成良好。8世紀後半代と思われる。



第6図　022・030・031号建物及び出土遺物実測図（1/60・1/3）

3．掘立柱建物

1、2地点合わせて3棟を検出したが、いずれも撹乱を受けたり、調査区外へ延びたりして規模を確定できるものはない。

022号建物（第6図）

1地点に位置する。建物の南部が001切られ、且つ調査区外に広がるため規模は不明である。2間×2間以上の建物であろうか。柱穴間は70cmを測る。柱穴は70～90cmの方形を呈し、深さは20～50cmを測る。各柱穴とも20cm前後の柱痕跡が残る。

出土遺物（第6図）

4は017号柱穴からの出土で須恵器蓋である。天井部は回転ヘラ削り、口縁端部及び内面はナデを施す。他に須恵器甕の細片、土師器片が出土している。また染付の細片も出ているが混入であろう。016号柱穴からは瓦質土器の火舎片が出土している。時期は遺構の平面形から古代と考えたいが、遺物は016号柱穴のもののように時期の下るものがあり疑問が残る。

030号建物（第6図）

1地点に位置する。018号土坑を切り、001号溝との前後関係は不明。南北に主軸をとる2間×2間以上の建物である。梁行3.4m、桁行3.5m以上を測る。各柱穴は直径約30cmの円形で、深さ40～

50cm を測る。10～20cm の柱痕跡が認められた。

出土遺物はなかった。中世以降の所産であろうか。

031号建物（第 6 図）

2 地点に位置する。削平、撹乱により規模は不明である。2 間× 3 間程度の建物であろうか。柱穴間は1.7m を測る。各柱穴は直径20～25cm の円形で、深さ15cm を測る。10cm の柱痕跡が認められた。

出土遺物はなかった。時期は不明。

4．井戸

024号井戸（第 7 図）

2 地点南部に位置する。上面を近世～近代の溝（026号溝）に切られる。長軸427cm、短軸320cm を測る。深さは350cm 以上を測るが、標高11.4m の付近から湧水が激しくなり、完掘できなかった。検出面から180cm、標高13m で地山が八女粘土層に代わるが、この部分で大きく横へ抉れている。井筒は確認されなかった。

出土遺物（第 8 図）

5 は瓦質の鍋で復元口径32.8cm を測る。内外面とも横方向のハケメを施す。口縁部はナデ調整。6 ～ 8 は染付皿である。6 は口径14.4cm、器高4.2cm を測る。底部を蛇の目凹形高台とする。7 は口径12.3cm、器高3.3cm を測る。器壁が厚く、内面に 2 重斜格子文を描く。見込は蛇の目に釉を剥ぎ取る。8 は口径13.2cm、器高4.0cm を測る。内面に 2 重斜格子文を描く。見込は蛇の目に釉を剥ぎ取る。9 は青磁の口縁部輪花の皿で、復元口径31.6cm、器高6.3cm を測る。見込に文様を描くが内容は分からない。他にも陶器、染付、土師質土器、瓦等が出土している。時期は18世紀後半～19世紀のものと思われる。

5．溝

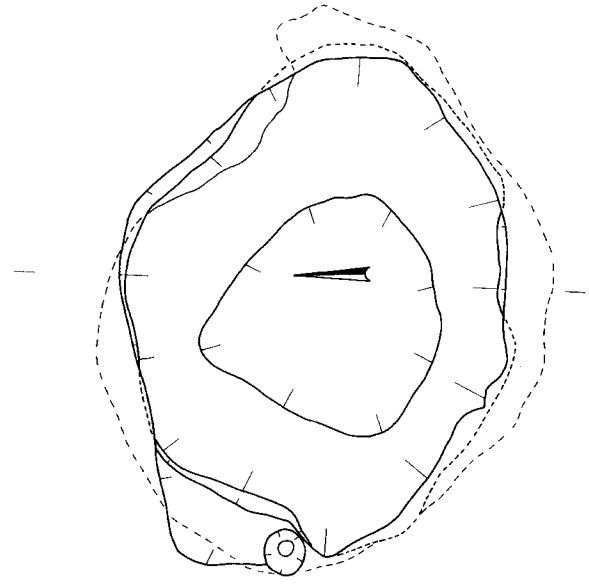
4 条ほど検出したが、報告しない 2 条は近世末～近代のものと思われる。

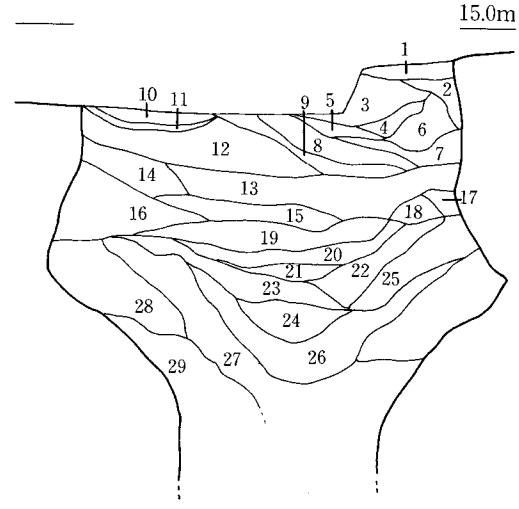
001号溝（第 9 図）

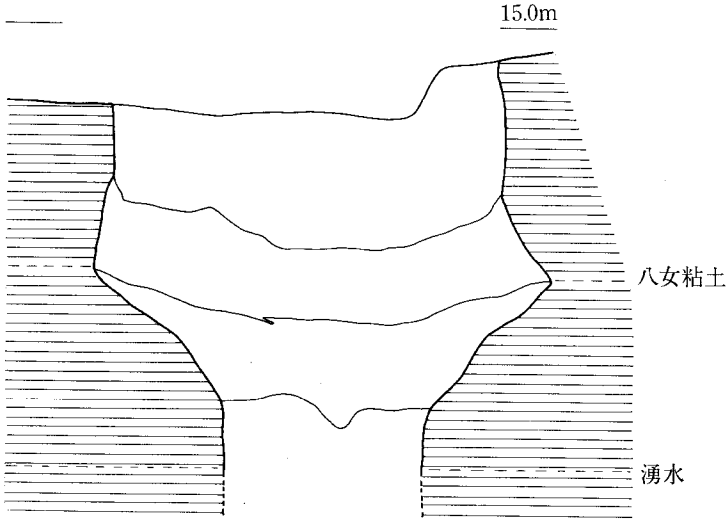
1、2 地点に位置する。北東から南西に湾曲しながら延びる。断面形はだれた逆台形を呈し、2 地点では壁面にピットが並ぶ。幅227cm ～276cm、深さは最大で130cm を測る。埋土は全体的に締まっておらず、掘り直しがみられる。後世まで窪み状に残っていたものと思われる。

出土遺物（第 9 図）

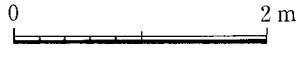
出土遺物は上、中、下層の 3 層に分けて取上げたが、大半は上、中層のもので、下層は少量であった。10、11は須恵器蓋である。10は復元口径11.4cm を測る。つまみがついたものと思われる。天井部は回転ヘラ削り、他はナデを施す。11は復元口径14.4cm を測る。天井部は未調整、他はナデを施す。12～15は須恵器椀である。12は復元高台径11.2cm を測る。13は復元高台径8.8cm を測る。15は復元高台径7.2cm を測る。以上の遺物は遺構の直接の時期を示すものではないと思われる。16は瓦質土器の擂鉢である。調整は外面が器壁荒れており不明、ナデか。内面は横方向のハケメの後、6 本単位の下ろし目を施す。17～19は土師器の坏である。底部は17、18が回転糸切り。19は器壁が荒れて不明。20は白磁の椀である。21は青白磁の小椀である。見込に印文が施される。22は陶器の皿である。復元口径12.8cm、器高3.3cm を測る。灰白色の釉が内面と外面中位まで施され、体部下半は露胎である。見込みには目跡が残る。23は瓶の口縁部で復元口径7.4cm を測る。オリーブ褐色～オリーブ黒の釉が施される。24は天目椀である。以上から遺構は16世紀代には埋没していたと思われる。



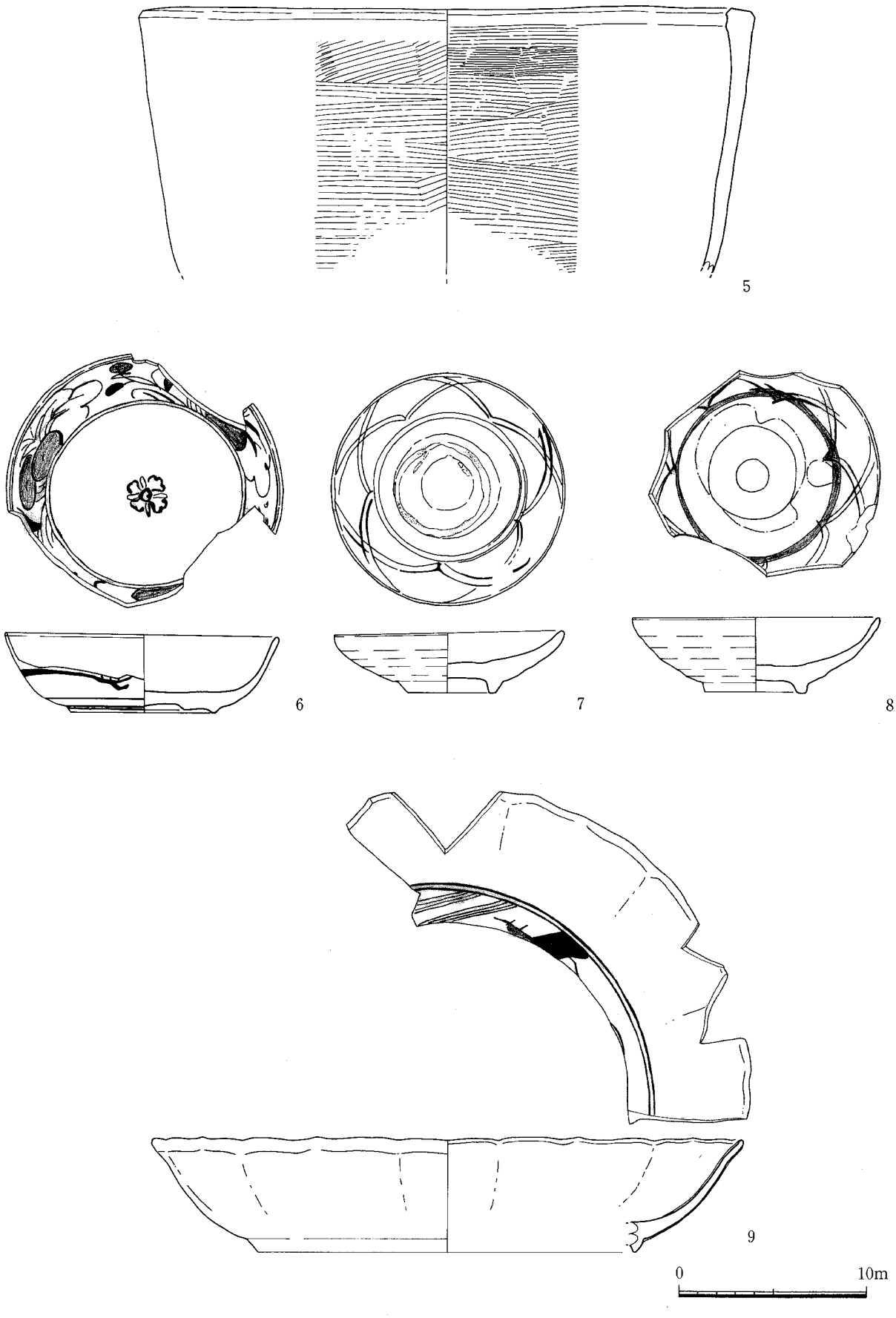




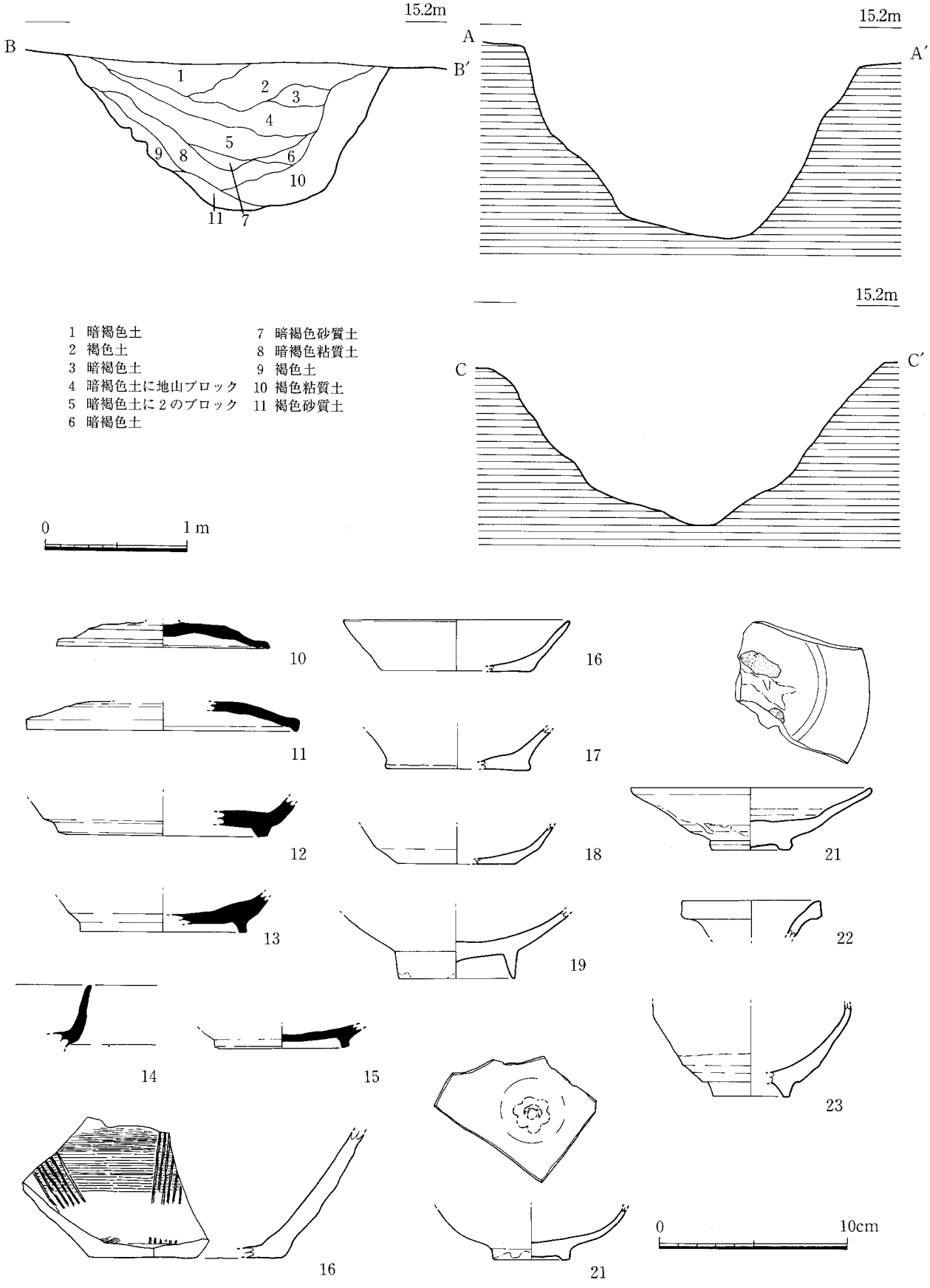
1 暗灰褐色土
2 褐色粘質土に地山ブロック
3 暗灰褐色土
4 黒褐色土
5 暗灰色土
6 灰褐色土
7 暗灰色土に褐色土ブロック
8 褐色土と暗灰色土の混合
9 暗灰色土
10 褐色土
11 黒褐色土
12 褐色土（しまっていない）
13 暗褐色土に細かい地山ブロック
14 褐色土に暗褐色土が混じる
15 暗褐色土
16 褐色土（しまっていない）
17 褐色土
18 灰色砂質土
19 暗褐色土に僅かに地山ブロック
20 褐色土と暗褐色土の混合
21 灰色粘土（遺物を多量に含む）
22 褐色土（しまっていない）
23 灰色粘土に砂岩質の石を多く含む
24 灰色粘土に褐色土ブロック
25 褐～暗褐色土
26 褐色土と灰色粘土の混合
27 褐色土（砂粒多い）
28 褐～暗褐色土
29 褐～暗褐色土（砂粒多い）



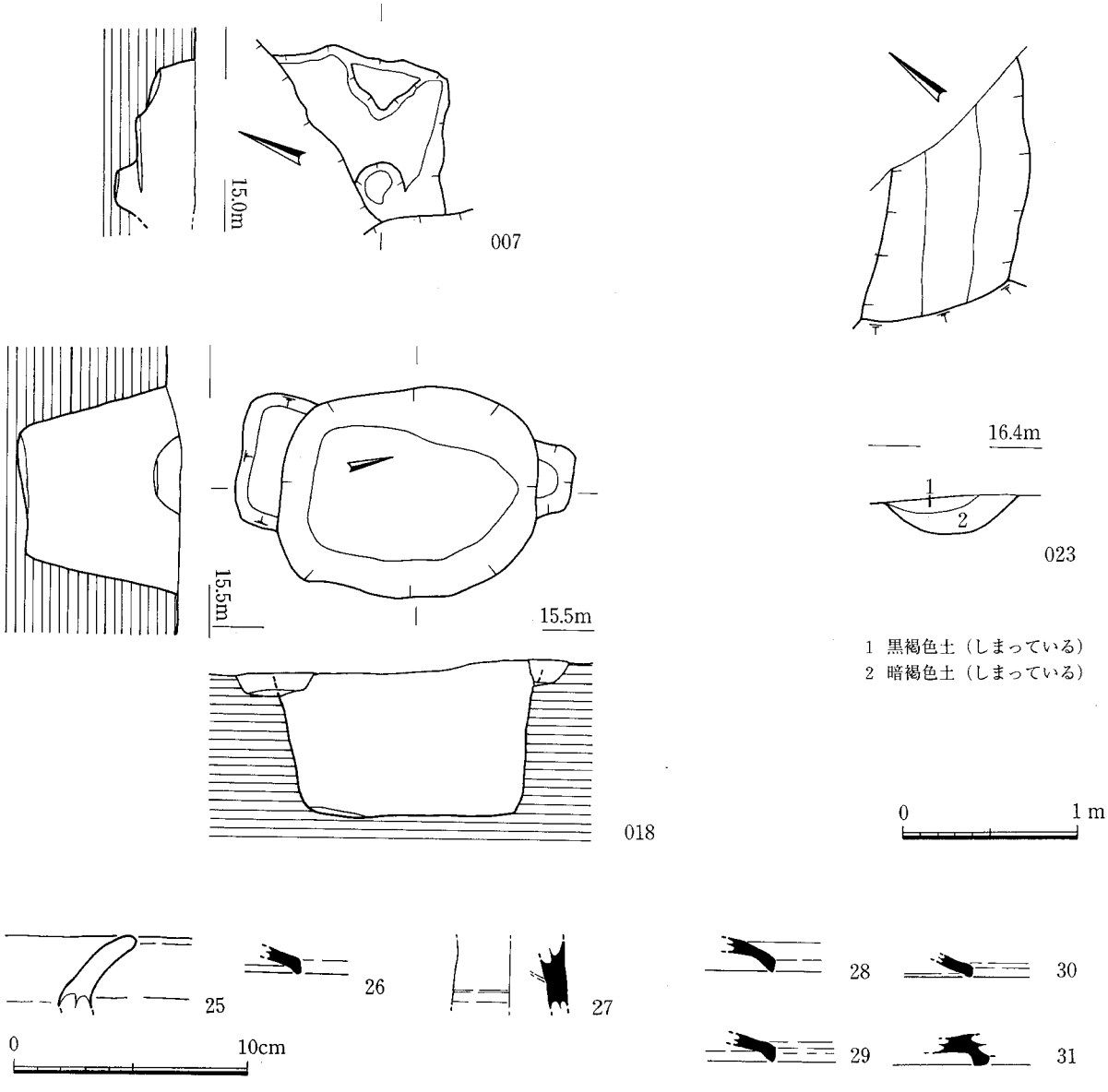
第7図　024号井戸実測図（1/60）



第 8 図　024号井戸出土遺物実測図（1/3）



第9図　001号溝及び出土遺物実測図（1/40・1/3）



第10図　008号溝・007・018号土坑及び出土遺物実測図（1/40・1/3）

023号溝（第10図）

2地点北端に位置する。北は調査区外に延び、南は撹乱に切られる。幅80cm、深さ23cmを測る。埋土は下層が締まっていない。

出土遺物

出土遺物はいずれも細片ばかりである。25は土師器甕の口縁部である。26は須恵器蓋である。27は須恵器高坏の脚部である。内外面ともナデを施し、外面には沈線が1条巡る。他に土師器の小皿と思われる小片が出土している。時期は古代と思われるが中世まで下る可能性がある。

6．土坑

007号土坑（第10図）

1地点北東端に位置する。001に切られ、規模は不明。深さは47cmを測る。平面形は方形か。東壁にテラスが付き、床面はピット状に1段深くなる。埋土は褐色粘質土で締まっており、炭化物の細かい粒が少量混じる。

出土遺物（第10図）

出土遺物はいずれも細片ばかりである。28～30は須恵器蓋の口縁部である。31は須恵器椀の高台部である。他に土師器片が出ている。以上から遺構の時期は8世紀後半代と考えられる。

018号土坑（第10図）

1地点南端に位置する。030号建物に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ146cm、幅120cm、深さ89cmを測る。埋土は地山と暗褐色土がブロック状に混合しており、上部は締まっていなかった。

出土遺物

遺物は馬の歯が出土している。歯の部位は右上顎の臼歯でP3～M3まで。P3については細かく破損している。左右下顎の臼歯でM3の可能性があるもの。推定年齢は6～8歳程度。他の出土遺物が土師器の細片1点のみで時期については不明である。

Ⅳ．おわりに

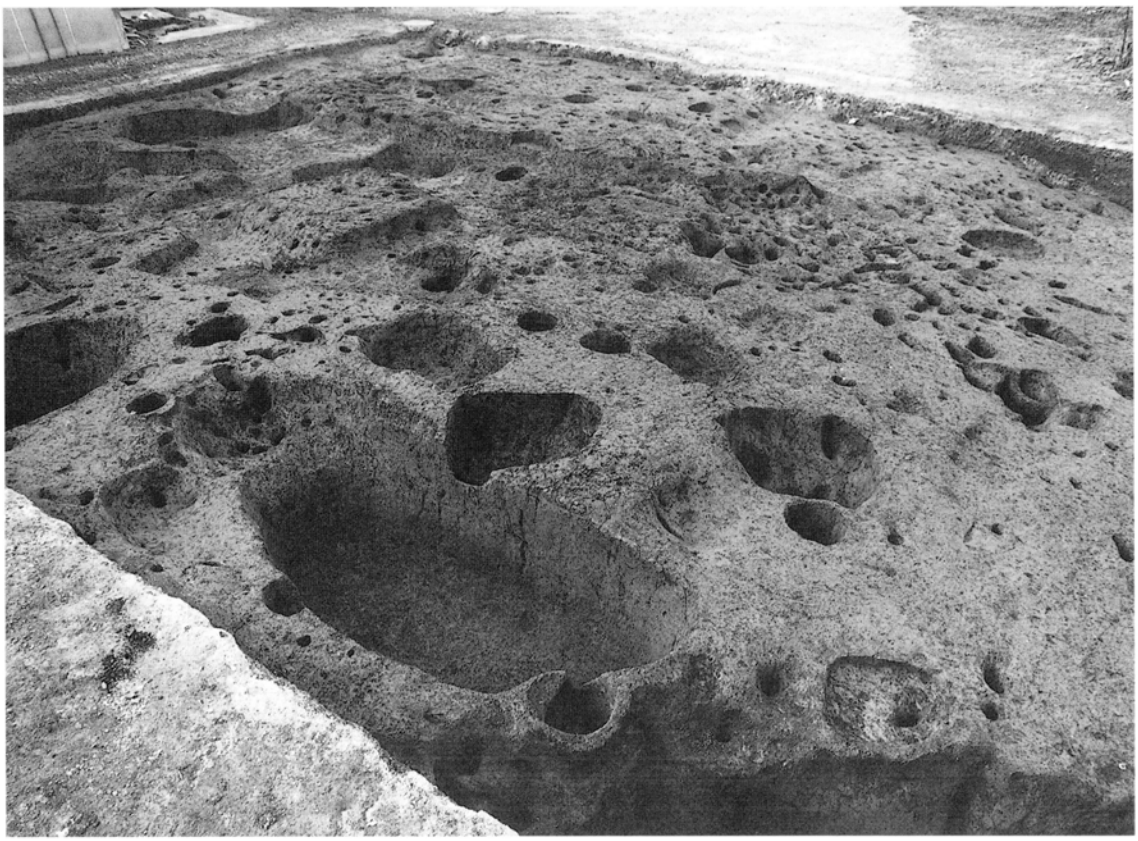
今回の調査では400㎡以上を調査したが、削平と撹乱により検出した遺構は多くなく、その大半は残りが悪い。麦野A遺跡群の中心をなす古代については竪穴住居1軒、土坑1基、やや時期に疑問が残るものの、掘立柱建物1棟、溝状遺構1条を検出したのみである。しかし、001号溝出土土器のように、時代の下った遺構から須恵器等の該期の遺物が少なからず見られることから、本来は他の調査地点同様、ある程度まとまった住居群が存在していたと思われる。尚、同一敷地内で北側に接する第7次調査において8世紀後半～9世紀初頭の公的施設と考えられる溝、柵列、門遺構が確認されているが、これと直接関連するものは確認されなかった。中世については後半期以降に掘削されたと考えられる001号溝がある。また030号建物が平面形からこの時期の可能性があるが、いずれにせよさほど密度の濃いものではなかったであろう。

図　　版

（1）調査区1地点全景（南から）

（2）調査区2地点全景（西から）

（1）025号住居（西から）



（2）022号建物（南から）

（1）024号井戸（西から）

（2）001号溝（南から）

（1）001号溝土層（南から）

（2）018号土坑（東から）

麦野A遺跡

—麦野A遺跡群第10次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第719集

2002年3月29日発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1－8－1

印刷　株式会社　富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番45－1